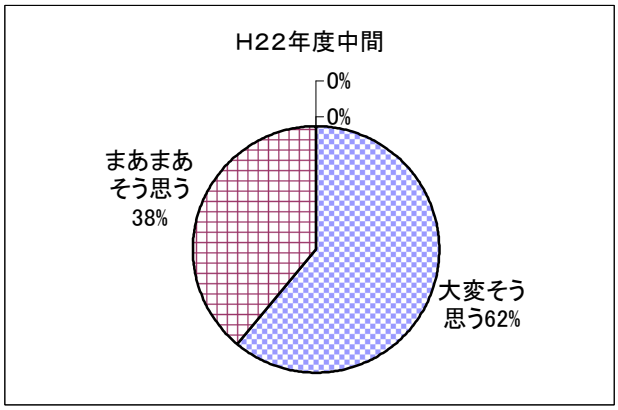
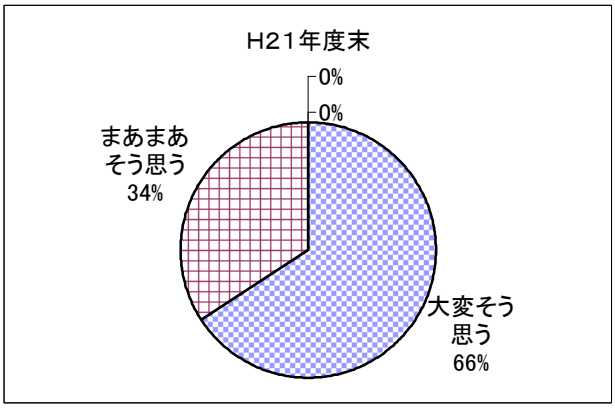
平成22年8月9日　　学校評価委員会

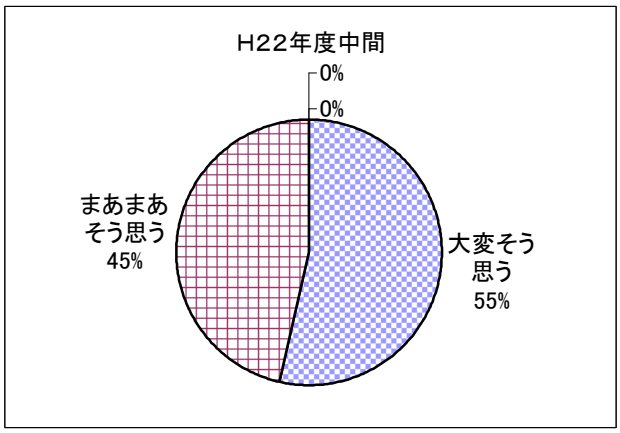
平成22年度 学校評価 教職員自己評価結果グラフ（7月）

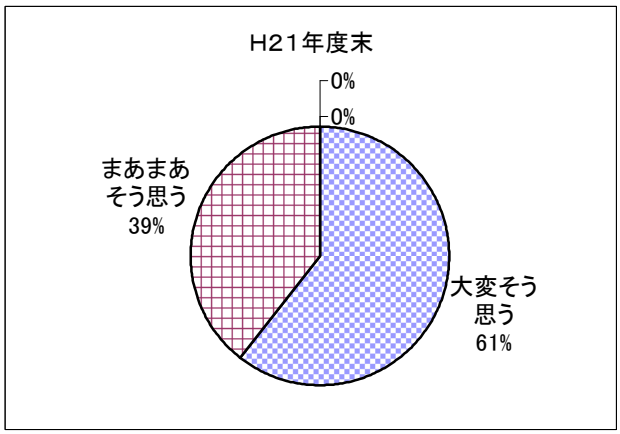
1 教育的愛情で接し信頼される教師をめざしている



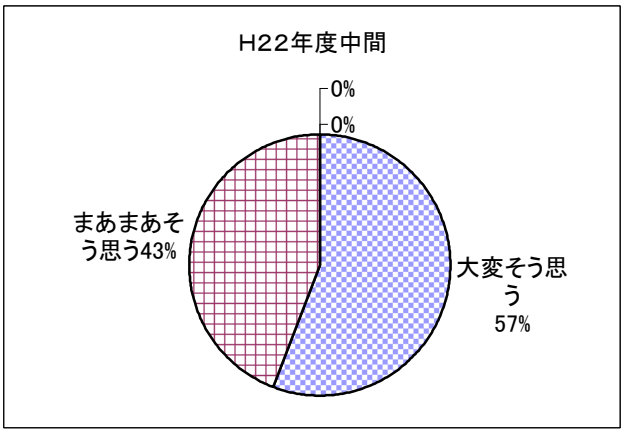


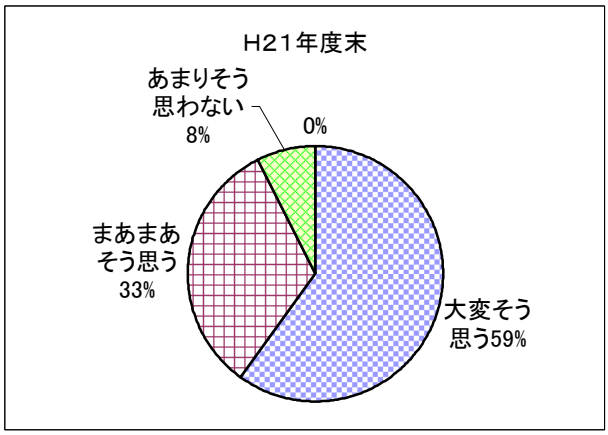
2 教育者としての力量向上に努める教師をめざしている





3 互いに協力できる温かさのある教師集団をめざしている



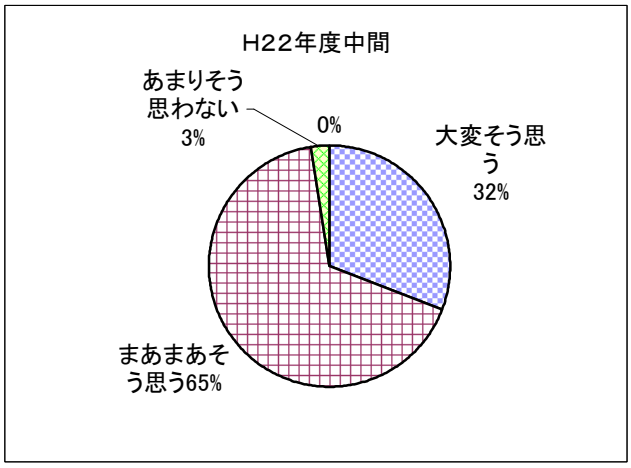


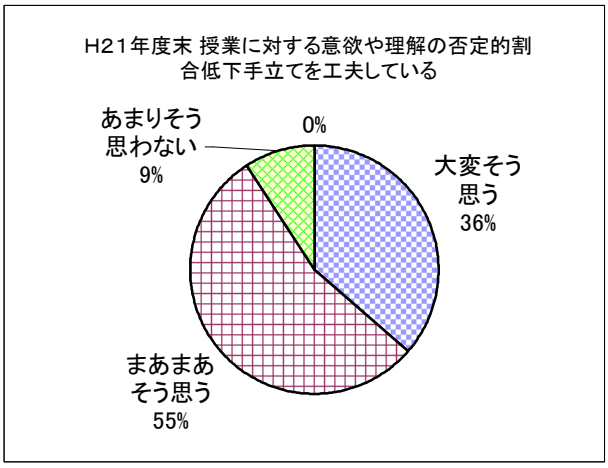
めざす教師像3項目について、教職員自己評価の肯定的自己評価割合100%をめざすという経営目標を達成できており、教職員集団の使命感の高さがうかがえる。

平成22年8月9日　　学校評価委員会

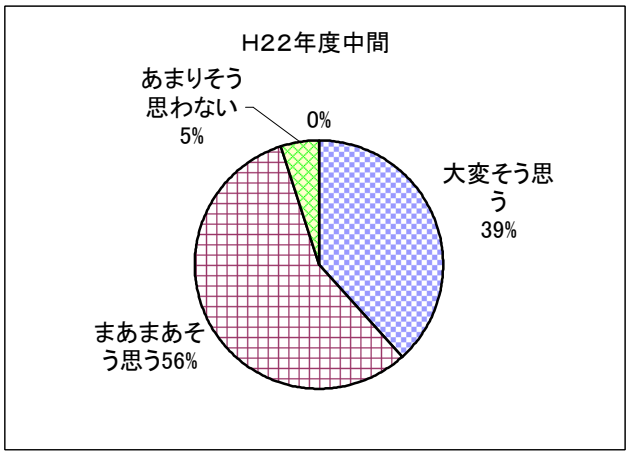
平成22年度 学校評価 教職員自己評価結果グラフ（7月）

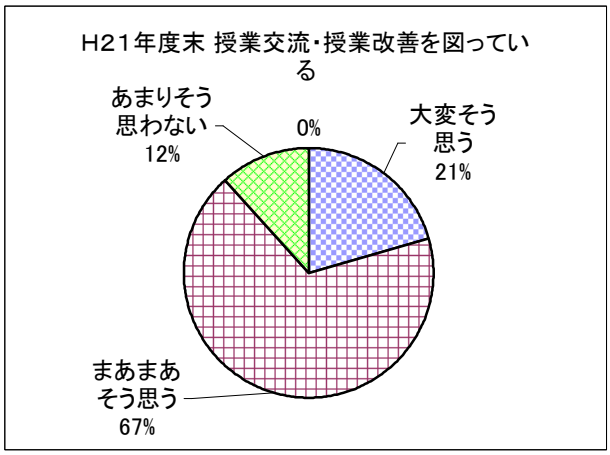
4 授業が「よく分かった」「意欲的に取り組んだ」という肯定的評価を共に85%～90%以上にするための手立てを工夫している





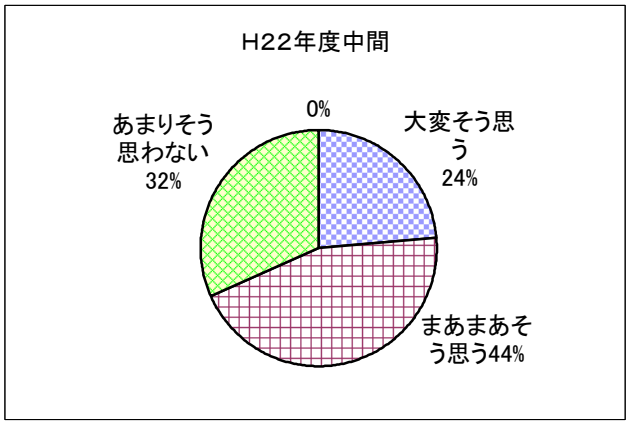
5「よく分かる授業の創造」をめざした授業改善を図っている





教職員自己評価では94.87%が肯定的であるが、生徒自己評価では授業が「よく分かった」と感じた割合が81.91%であり、目標の85%以上にいたっていない。今後もさらに、よく分かる授業のための授業改善を組織的に推進していく必要がある。

6 ICT活用等により、生徒の学習意欲の維持向上を図っている

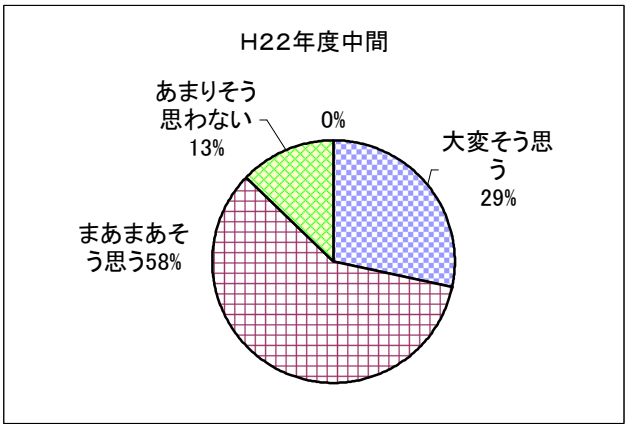


教科の特性もあるが、ICT活用を積極的に導入している教科とそうでない教科の差がはっきりとしている。授業改善を図り「分かる授業」及び「学習意欲」の向上を図るためのひとつのツールとしてICTをどう活用できるか教科会や校内研修、授業交流を通し、今後も研究を進めていく必要がある。

平成22年8月9日　　学校評価委員会

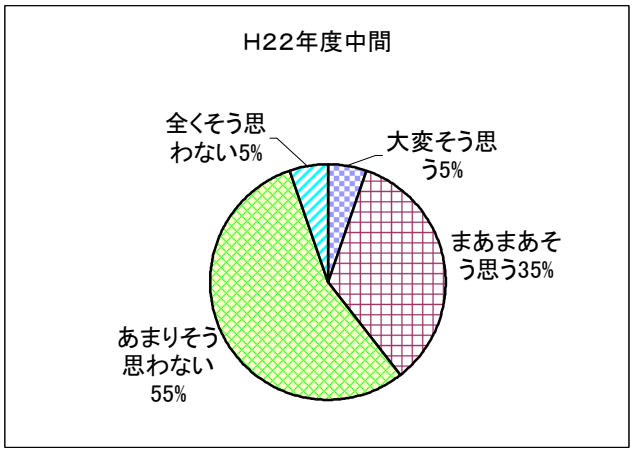
平成22年度 学校評価 教職員自己評価結果グラフ（7月）

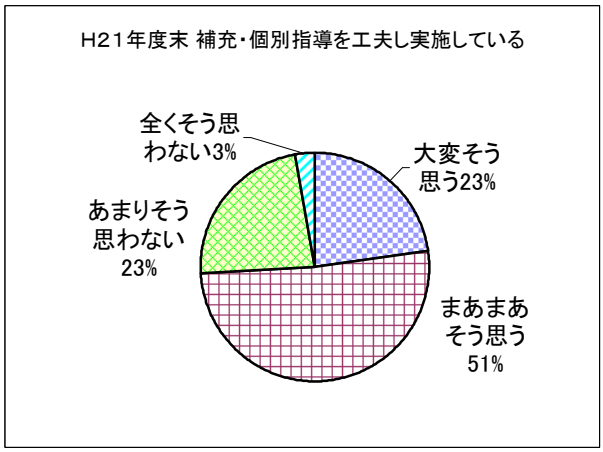
7 授業以外の時間に分からないことを質問できる雰囲気と環境を作っている



教職員の肯定的評価割合は87.18%を示しているが、生徒が実際に質問に行っている割合は41.78%という結果になっている。これは、生徒が遠慮していることも考えられ、雰囲気・環境づくりを今後さらに促進させていく必要がある。

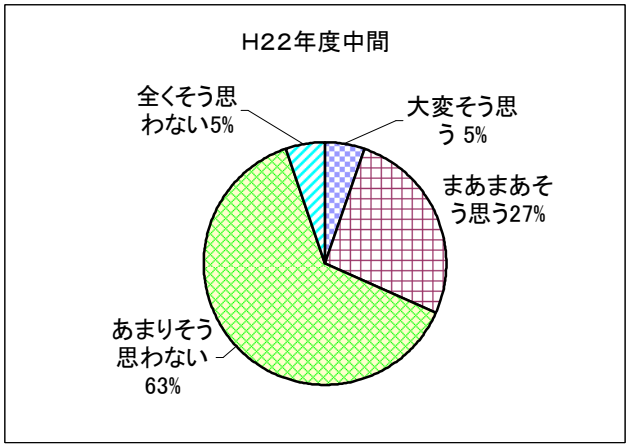
8 週1回1時間の個別・補充学習の機会設定と長期休業中の認知カウンセリングの機会を設定している





生徒自己評価からもうかがえるが、個別指導や補充学習の機会がもてていない。夏季休業中には全学年とも補充学習の実施や、部活動指導の一環として学習時間を設け取り組んでいる教師もいるが、改善の必要がある。なお、今年度は広島大学の協力を得て「学習（認知）カウンセリング」を設定した。

9 現行家庭学習の手引きを改善しようとしている

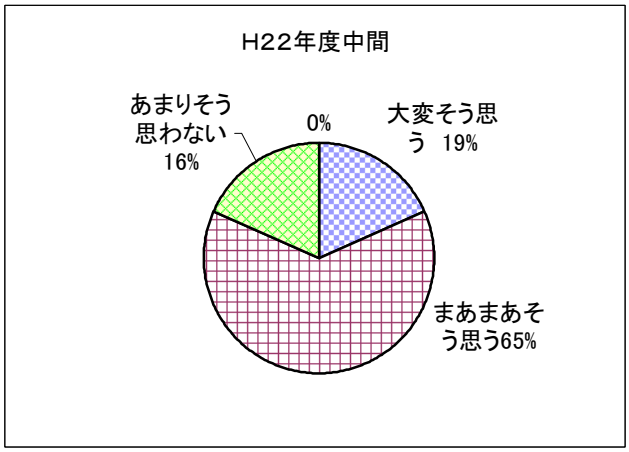


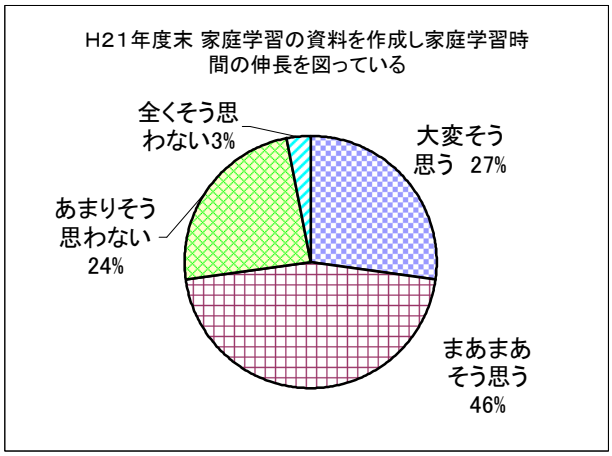
生徒の自己評価をみると、家庭学習に意欲的に取り組んだという肯定的評価は69.88%である。一方、取り組み時間でみると「全くしていない」「30分以内」という生徒が17.88%いる。効果的な家庭学習の行い方を指導していくためにも定期的に現行手引きを改善していくことが大事である。

平成22年8月9日　　学校評価委員会

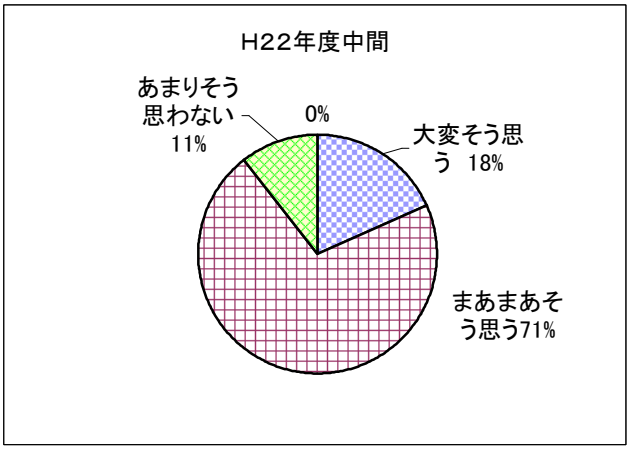
平成22年度 学校評価 教職員自己評価結果グラフ（7月）

10 取り組みの良さを共有し、家庭学習の習慣性と実践力を高めている

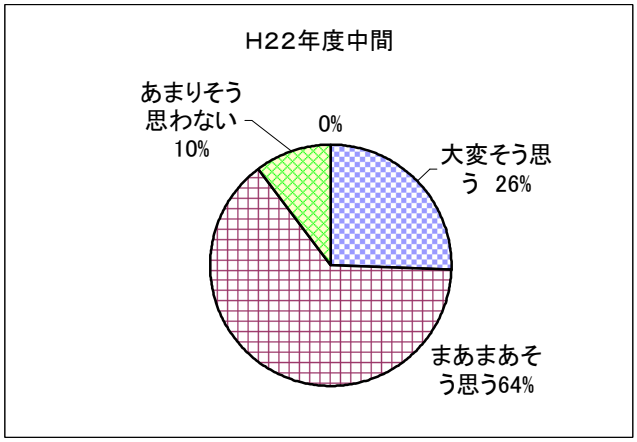


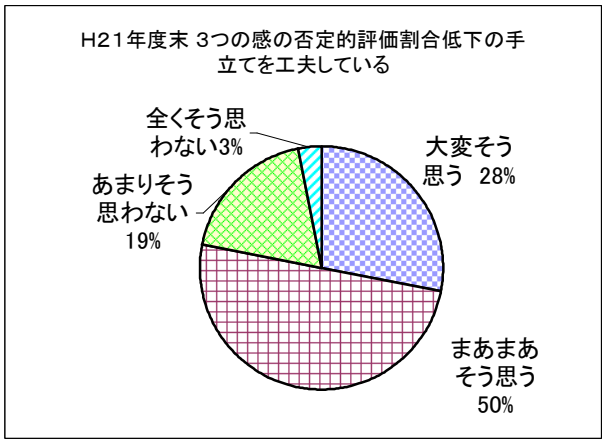


11 自ら考え実行する生徒の育成における肯定的評価を50%以上にする手立てを工夫している



12 自己存在感、自己効力感、自己有用感の否定的評価各15%未満、25%未満、45%未満をめざしている



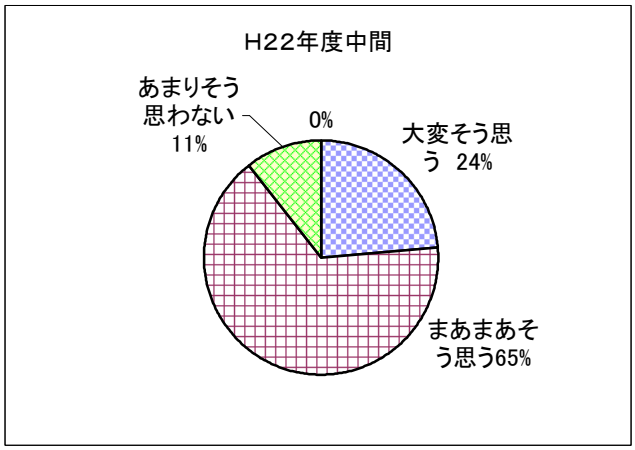


生徒アンケートから「自己存在感」「自己効力感」「自己有用感」の否定的評価割合をみると、それぞれ19%（昨年度17%），27.61%（昨年度25.07%），47.19%（昨年度45.95%）となっており、いずれも前年度より否定的評価割合が2%程度増加している。諸活動を通し否定的評価割合が15%未満，25%未満，45%未満となるようめざしていく目標に到達できていない。一方、教職員自己評価で「3つの感の否定的評価割合が目標数値となるようめざしている」という項目の肯定的評価割合は89.74%を示している。教師の自己評価と生徒の自己評価との差が課題である。今後さらに生徒の3つの感が高まる取り組み推進が求められる。

平成22年8月9日　　学校評価委員会

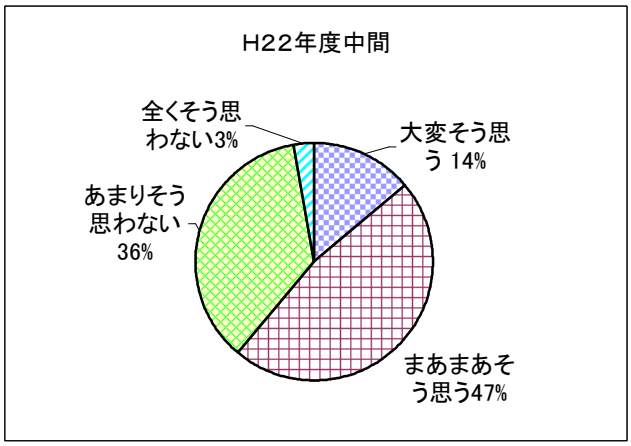
平成22年度 学校評価 教職員自己評価結果グラフ（7月）

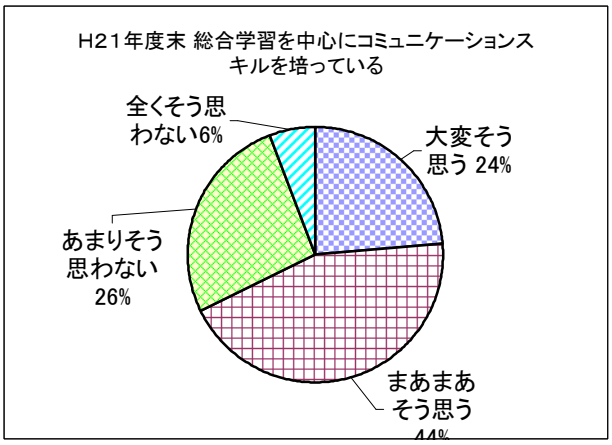
13 ひろカリの適切な実践を通して、考えることのおもしろさ等を生徒に実感させている



「考える楽しさ」を感じているという肯定的評価割合を学年別にみてみると、1年生76.2%，2年生46.9%，3年生58.6%であり、平均すると約61%であった。教職員自己評価における肯定的評価割合は89.47%という結果を示している。生徒の感じ方と28%程度の差がみられる。言語・数理運用科の授業をはじめ、各教科において「思考する活動」を通し、求められている学力向上をめざす必要がある。そのための授業改善していく教職員の共通認識を高めなくてはならない。

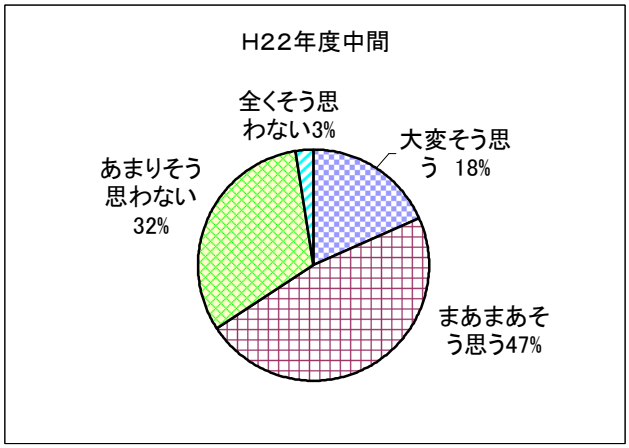
14 ELS、協同（グループ）学習等を取り入れ、人間関係づくりの実施等を通して3つの感を高めている





ELS（ライフスキル教育）については、後期に導入していく予定である。グループ学習の実践については積極的に取り入れている教科とそうでない教科の差がみられる。「学力向上」を図る授業改善のためのひとつのツールとして協同学習を取り入れながら、推進していくことが課題となる。

15 全教科・全領域にESDの内容を取り入れ、カリキュラムの編成と実践を行っている

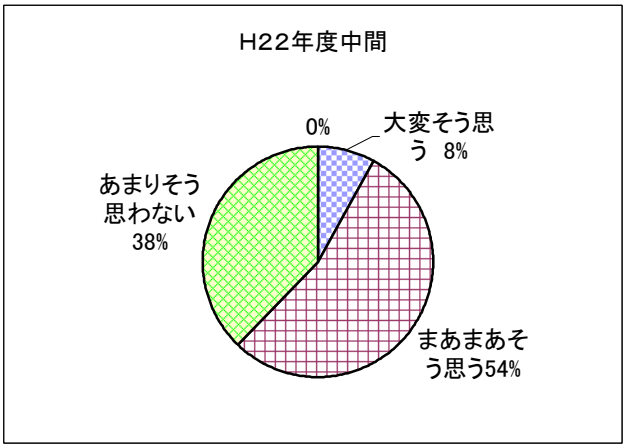


ESD（持続発展教育）のカリキュラムを作成するため、各教科、道徳、総合的な学習の時間並びに特別活動の内容からESDに関する内容を抽出した。今後は、クロスカリキュラムの作成と併行実践との統合を図っていくことになる。

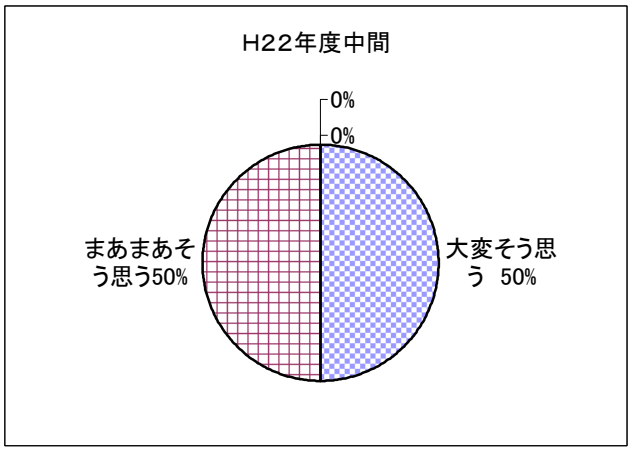
平成22年8月9日　　学校評価委員会

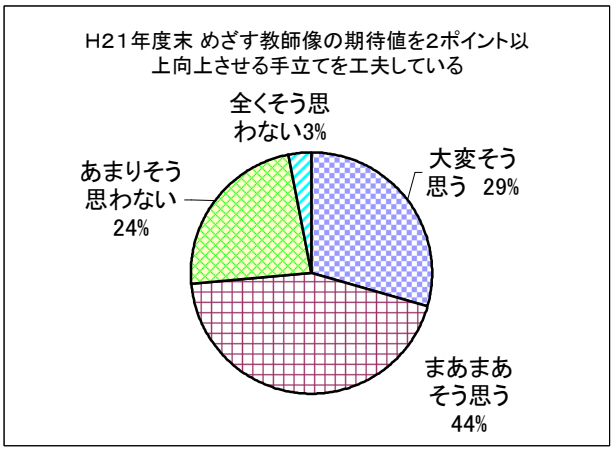
平成22年度 学校評価 教職員自己評価結果グラフ（7月）

16 図書室利用及び読書の1ヶ月1冊未満の生徒を0%にするために、全教職員で読書活動の充実を図っている



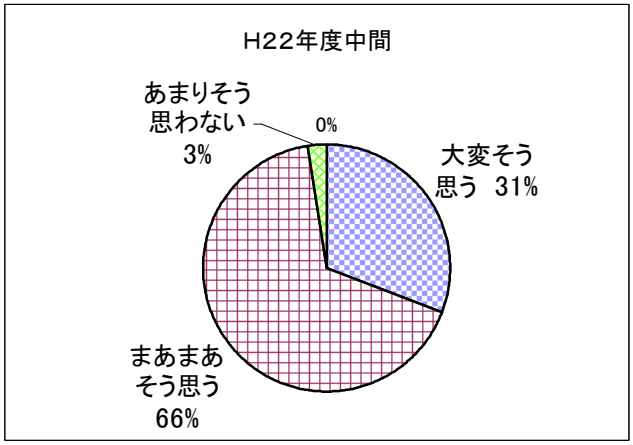
17 めざす教師像における3項目の肯定的評価100%をめざしている

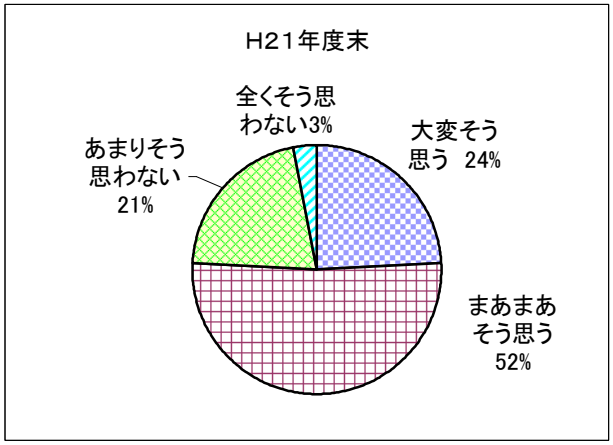




めざす教師像3項目について、教職員自己評価の肯定的自己評価割合が100%を達成しているが教職員個々の意識は「大変そう思う」と「概ねそう思う」が半々となっている。

18 特別支援教育の視点に立ち生徒実態を把握し、個別の指導計画の作成・共有化を図ると共に、予防的生徒指導の推進を図っている



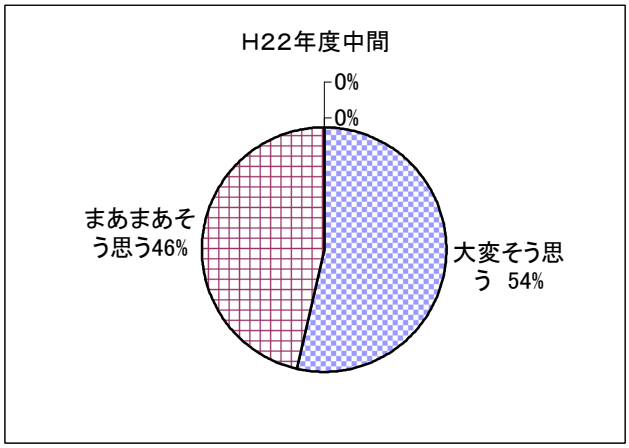


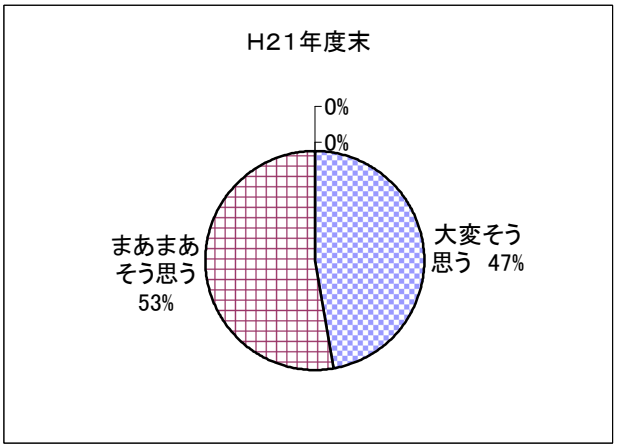
昨年度と比較して、肯定的評価割合が97.44%（昨年度75.76%）となっている。特別支援教育の視点に立った生徒の実態把握と生徒理解に努めること、また、教職員の予防的生徒指導の意識が高くなっていると分析できる。

平成22年8月9日　　学校評価委員会

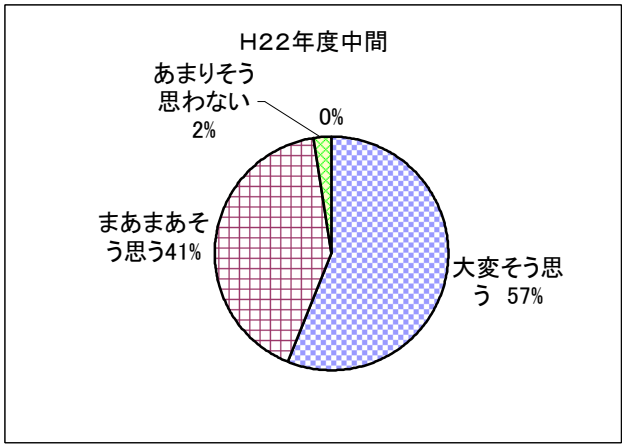
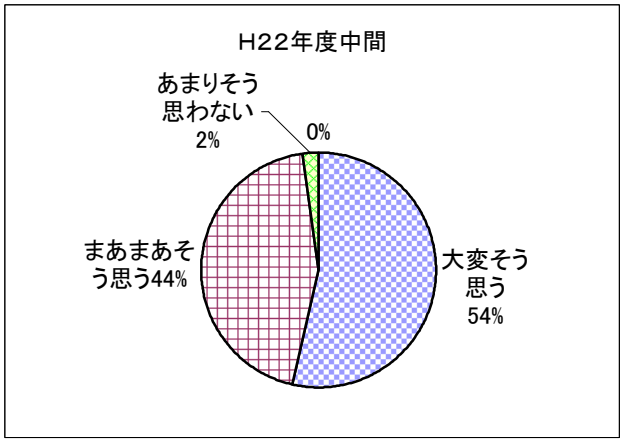
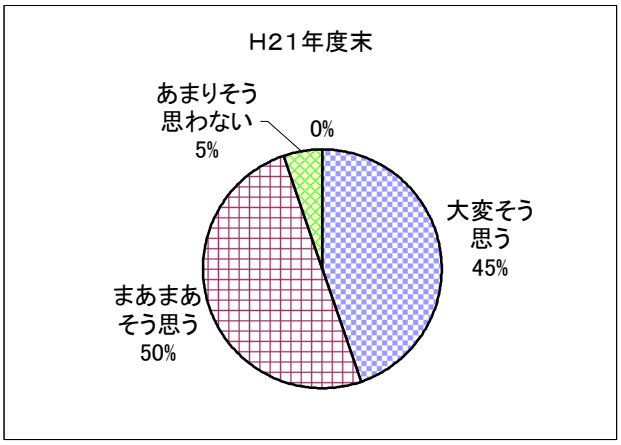
平成22年度 学校評価 教職員自己評価結果グラフ（7月）

19 生徒一人ひとりを大切にした教育を展開している





20 教職員全員の協力を通して落ち着いた学習環境を生徒に保障している



21 各自が自己の役割や責任を果たしている